

天草方言で読む【平家物語】

鶴田 功〈訳文〉

平家の栄華と没落を描いた鎌倉時代の軍記物語

平家物語 〈原文〉

祇園精舎の鐘の聲、諸行無情の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を頭わす。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

猛き人も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

遠く異朝を問らんに秦の趙高、漢の王莽、梁の朱伊、唐の祿山、是らは旧主・先皇の政に従はず、楽しみを極め、諫をも思い入れず、天下の乱れむことをも悟らずして、民間の愁ふるところをしらざりしかば久しからずして亡じにし者なり。

近く本朝を伺ふに承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、是等は驕れる心も猛きことも皆とりどりにこそありしかれどもまぢかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公という人の有様伝へ承るこそ心も詞も及ばれぬ。

〈意訳〉

古代インド祇園精舎寺ん鐘の聲は、諸行無常（つまり、万物は常に移り変わって、いつときも現状バ保持でけん、儻かもんぱい）ちゅて鳴り響いとる。

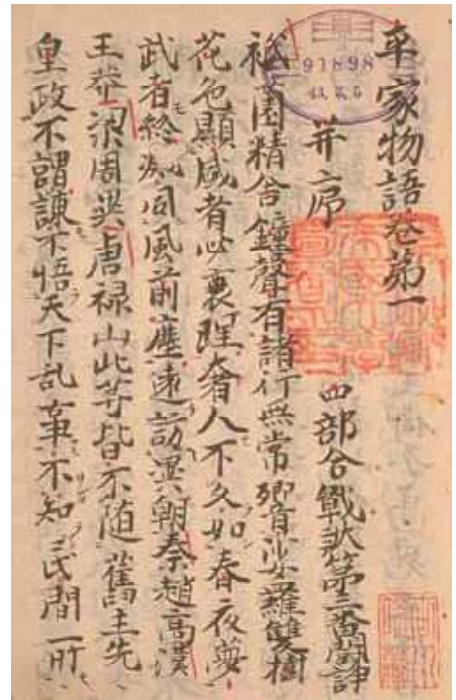
娑羅双樹の花ン色は、盛者必衰（盛んな者は必ず衰える）ちゅう世の道理バ現しとる。だけん、豪奢な生活バしとる人も、いつまっでんそん地位に留まっとるこたでけん。ちようど春の夜の夢とおなしこったい。

勢力勇猛なもんな、結局滅びてしまう。風に吹き飛ばさるる塵ンごたるふうたい。

古代中国の例で言えバ、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱伊、唐の祿山、こん人達や皆、自分の元主君とか先代の皇帝の政治バ疎かにして、楽しみごとにつつバ抜かし、人ン忠告にも耳バ貸さず、世の中が乱るることに気付かんで、人民が苦しゅうどることさえも知らんじゃったけん、長ごうせんうち、うっ潰れて破滅した者どもたい。

近く、我が国でん、承平の平将門、天慶の藤原純友、康和の源義親、平治の藤原信頼、こん人たちも、たんとき滅うだ。驕りはたがって、勇猛じゃったばってネ。

最近じゃ、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公ちゅう人は、噂じゃ想像することも、ことばにもできんごたるテイタラクちゅた。



殿上の闇討

忠盛が、まだ備前守だったとき、鳥羽院の御願寺の得長寿院に造営して差し上げ、十三間の御堂に建て一千一体の御仏に納めた。供養は天承元年三月十三日。

褒賞として、但馬国の国守が空いとったけん、その地位にもらた。鳥羽上皇は、なお、ご感心のあまり、内裏の清涼殿の昇殿に許した。こがんで忠盛は三十六歳で初めて昇殿した。

公卿・殿上人たちは、こり^よに妬んで同年十一月二十三日五節^{ごせつとよ}豊の明の節会の夜、忠盛に闇討にしゅうて計画をたてた。こん事^{こと}に伝え聞いた忠盛は、「武勇の家に生まれて、不慮の恥にあうことは我が身のため、家のためにも残念なことだ。身を全うして君に仕えるちゅう本文もある」ちゅうて用意をしとった。

まず大か^{おと}鞆^{さやまき}巻に用意して抜いてみせたりした。また、左兵衛尉家貞という者^{やみうち}に護衛につけた。そんためか、その夜の闇討はなかった。

忠盛が御前に召されて舞を舞うたとき、人々は「伊勢平氏は、^{すがめ}眇（斜視）じゃもね」とはやした。忠盛はどがんでもしよんなしゃ御遊も終わらんうち、退出しようてした。

そん時、紫宸殿の後で側の殿上人が見とらすところで主殿司^{とのもつかさ}に呼んで、刀をあずけて退出させた。

待っていた家貞が「いかがでしたか。」と聞いたばって、うっかりしたことば言うて殿上までも斬り上がろうとする者だけけん「特別のことはなかった」ちゅうて答えた。

五節の節会が終わったあと、殿上人たちが口^{くち}に揃えて「忠盛は武士に殿上の小庭に連れきて、刀を持って節会の座に列席しとる。けしからんことだけけん、首にすべきだ」と、訴え出たけん、鳥羽上皇は驚いて忠盛にたずねた。忠盛は「家来が殿上の小庭に来ていたとは知らんじゃったばって、人々が何か計略しているとかいうことだけけん、そりば伝え聞いた家来がこっそり来ていたとしたら、いたしかたのなか事たい。刀は主殿司^{とのもつかさ}に預けておいたけん、それば調べてほしい」ちゅうた。刀は木刀に銀箔^{ぎんぱく}に貼り付けた物じゃった。

「当座の恥辱に逃るるため、刀を帯びとるごて見せかけ、後日訴訟がある事^{こと}に考えて木刀にしとったという用心深さは感心だ。家来の件は武士の家来の常の事である。忠盛の罪ではなか」といって、かえってお褒めにあずかったけん、特に罪科に処するというような事はなかった。

鱸

忠盛の子は諸衛の佐^{すけ}になった。そして昇殿したばって、もう殿上の人^{ひと}が交際^{かうさい}に嫌うことなかつた。

鳥羽院の御所に忠盛の最愛の女房^{にようぼう}がいた。その女房は薩摩守忠度の母である。

忠盛は刑部卿^{にんべい}になって、仁平三年正月十五日に五十八歳で死んだ。

清盛は嫡男で跡^{あと}に継いだ。保元元年七月に宇治左大臣頼長^{よりなが}が世に乱したとき安芸守として勲功があったけん、播磨守^{はまのり}に移って太宰大貳^{たさいだいに}になった。

平治元年十二月、藤原信頼卿^{のぶより}が謀反^{ぼうはん}におこしたとき、賊^{あし}に平らげ重く恩賞^{おんしょう}を与えられ

て、翌年、正三位、参議、衛府督、檢非違使別当、中納言、大納言、そして左右の大臣バ経んで、内大臣から太政大臣、従一位に上がった。

平家がこが栄えたとも熊野権現のご利益ということじゃった。

清盛が安芸守だったころ、伊勢から熊野さん船で参詣したとき、大か鱸が船ン中に躍り込むできた。先導の修験者がいうには「これは権現の御利生じゃ。いせえで参れぞ」と言うたけん、清盛は「昔、周の武王の船にさえ、白魚が躍り入ったちゅうことだけん、是は吉事ぞよ」ちゅて家ン子やら侍たちに食べさせた。以後、吉事が続いた。

かぶろ 禿髪

清盛は、仁安三年十一月十一日五十一歳で病気にかかり、存命のために出家した。法名ば浄海ていう。そのため、病気が治って天寿を全うした。

人が従いつくことは風が草木バなびかすごとくじゃった。入道相国のこじゅうと平大納言時忠卿の言うには、「この一門じゃか者な、みな人でなしじゃろう」て言うた。

清盛の勢い盛んなころは、少しでん悪口言う者な無かった。どうして、入道相国のはかりごととして、十四・五・六の童部わらべバ三百人そろえて、髪かみの回りバ切り垂らさせ、赤っか直垂バ着せて召し使うておって、京都中バ往来させとった。

平家バ悪く言うものがあると、仲間なかまでそんな家に乱入し、家財道具バ没収し、その男バ縛り上げて六波羅につれてくる。

そのため、平家の横暴バ口に出して言うもんなおらんじゃった。

えいが 吾身の栄花

一門共に繁栄し、嫡子重盛は内大臣で左大将、次男宗盛は中納言で右大将、三男知盛は三位の中將、嫡孫維盛は四位の少將。全部で一門の公卿は十六人。殿上人は三十余人。諸国の受領、衛府の役人、諸官など総計六十余人に及んだ。

八人の娘は、

一人は、花山院の左大臣殿の奥方。一人は、高倉天皇の後。皇子が皇太子となって即位さしたけん院号バ受け、建礼門院となる。一人は、六条の摂政殿の北の政所(まんどころ)政所。高倉院が在位まんどころのとき、養母として准三後の宣旨バこうむり白河殿として重んぜられた。一人は、普賢寺殿きたのまんどころの北政所。一人は、冷泉大納言隆房卿の北の方。一人は、七条修理大夫信隆卿のぶたかに連れそった。一人は、安芸の巖島神社の内侍から生まれた娘で、後白河法皇のもとで女御。一人は、九条院の雑仕、常葉の娘で、花山院殿の上臈女房ろうのおかたで廊の御方ていうた。

きさき 二代の後

故近衛院の后だいこうたいごうくうで大皇太后宮は、近衛天皇に先立たれてしもた後は、内裏バ出て近衛河原の御所に移りすんでいた。とても美人じゃらしたけん、二条天皇は入内じゅだいするごてちゅて右大臣家に宣旨バ出した。公卿も後白河上皇もゆうなかちゅて諭したばって聞き入れ

んで、入内の日バ定めて宣下してしもた。

大宮はいよいよながらも、しかたなく入内さした。

がくうちろん 額打論

永万元年春頃から、二条天皇病気のうわさが立ったが夏の初めに重体になってしまわした。

こんため、大蔵大輔伊吉兼盛^{かねもり}の娘ン皇子に親王の宣旨が下されて、その夜、天皇の位につきなした。

同年七月二十七日、二条天皇崩御。二十三歳。その夜香隆寺の北東、蓮台野の奥の船岡山に遺体バ納めた。葬送のとき延暦・興福の両寺の衆徒が額打論ちゅうこつを始めて乱暴をはたらいた。

天子の遺体バ御墓所に移す作法には、奈良と京都の衆徒がことごとく供をして墓所の周囲に自分の寺の額バ掛けるということがある。先ず東大寺、次に興福寺、次に延暦寺、次に園城寺の額バかくつとが例じゃった。

ところが延暦寺の衆徒が何バ思うたか、興福寺より先に延暦寺バ掛けてしもた。奈良の衆徒がどうしゅうか相談しとるうちに、興福寺の西金堂の衆徒ン観音房・勢至房ちゅう僧が、延暦寺ン額バ切り落とし、さんざんに打ち割ってしもた。

清水寺炎上

同じ七月二十九日の正午頃、延暦寺の衆徒が大勢京都に降りてくるちゅう噂がたった。武士・検非違使が西坂本に向かうて防いだばって、防ぎきらでにゃ衆徒たちは京都に乱入した。

後白河院が延暦寺の衆徒に行たて平家バ追討するちゅう噂が立ったけん、軍兵が内裏に参上して警備した。

平氏の一族は六波羅に集まり、後白河院も六波羅に御幸さした。

延暦寺の衆徒は清水寺に押し寄せ、仏閣・僧坊全部バ焼き払うた。清水寺は興福寺の末寺である。

山門の衆徒が比叡山に帰った後、後白河院も六波羅から帰った。重盛卿はお供をしたばって、清盛卿は行かんじゃった。

重盛卿が戻って清盛卿が言うには

「後白河院が前から平氏バ討とうと思つとるけん、こういう噂が立つとじゃろう。心バ許しちやいかんぞ」

重盛卿は、「そがん事バ人に気づかるるごたることがあっちゃいかん。天皇の考えに背かんで人ンために情けバ施しなされば、神仏のお守りがあるはずです」と申されてお立ちになったけん、

「重盛卿はえらか、大したもんばい」ちゅて父の清盛卿も言いなさった。

とうくうたち 東宮立

その年は諒闇だったけん、御禊・大嘗会も行われんじゃった。

永万元年十二月二十四日に建春門院が生んだ後白河院の皇子に親王の宣旨を下された。

翌年、仁安と年号を改め、十月十八日皇子は東宮に立つ。仁安三年三月二十日、新帝即位。六条天皇は五歳で上皇になられた。

新帝の母建春門院は、平家一門入道相国の北の方の、二位殿の妹である。

てんかののりあい 殿下乗合

嘉応元年七月十六日、後白河院出家。ばって、引き続き政治をとる。

嘉応二年十月十六日、小松殿（重盛）次男新三位中将資盛卿は摂政松殿（基房）に大炊御門大路の猪熊で出会うばって下馬の礼をとらんじゃった。基房側は資盛（すけもり）資盛らバ馬からひきおとして恥かかせた。

資盛は入道相国に訴えたけん、入道はえらいはるきゃあて「摂政殿に恨みをはらしたかもんだ」ちゅうと、重盛卿は資盛の方が悪かっただけんと諫めた。

その後、入道相国は小松殿に相談も無く二十六日猪熊堀河のあたりで三百余騎で摂政殿バとりかこみ、髻バ切ったり暴行を加えた。

入道はえらい喜うだばって、小松殿なあわてて侍どもバ咎め、「十二・三歳になろうとするものが礼儀を心得てふるまうべきじゃつとに、こがん無礼をはたらき、入道相国に悪いうわさをたつとは、不幸至極」と資盛バしばらく伊勢の国さね追いやった。

ししのたに 鹿谷

この事件の為、高倉天皇元服の打合せは延期になった。

摂政殿（松殿基房）は嘉応二年十二月十四日太政大臣に昇進した。

明けて嘉応三年正月五日、高倉天皇元服。入道相国の娘が女御として入内さした。

そんなころ、妙音院の太政大臣（師長）が、当時はまだ内大臣の左大将じゃったとばって大将バ辞任した。そんなとき徳大寺の大納言実定卿がその後任にあたっとるちゅわれとった。花山院の中納言兼雅卿も所望されまし、藤中納言家成卿の三男新大納言成親卿も切に所望さした。

ところが、そのころの叙位除目というのは平家の思うままであったけん、入道相国の嫡男小松殿（重盛）大納言右大将から左大将に、中納言であった次男宗盛が上位の貴族をとびこして右大将に加わった。新大納言は大いに不満じゃった。

東山の麓の鹿の谷。背後は三井寺に続いていて絶好の城郭であった。そこは俊寛僧都の山荘があり、いつも寄り集まり平家打倒の陰謀をめぐらせていた。

ある日、後白河法皇もあらわれた。故少納言入道信西の子息、静憲法印がお供バしとった。法皇がこん陰謀について静憲法印に相談したところ、静憲があわてさわいだけん、新大納言の顔色が変わりさつと立ち上がったところ、そんなとき前にあった瓶子バ狩衣の袖に引っかけて倒してしもた。

それば見た法皇が「ありゃどうしたこっか」と言うたところ、大納言は「平氏はたおれてしもたぞ」と言うた。法皇は笑うて、「者ども参って猿楽どもせろ」と言わしたけ

ん、平判官康頼が「あまり平氏（瓶子）が多かけん酔ってしもた」と言う。俊寛僧都が「さて、こりバどうしゅうかい」というと、西光法師が「首を取っとにこしたこたなか」と言うて、瓶子の首ば取って奥へ入ってしもた。

こん陰謀に参加したとは、近江中将入道蓮浄（れんじょう）蓮浄俗名成正、法勝寺執行俊寛僧都、山城守基兼、式部大輔雅綱、平判官康頼、宗判官信房、新平判官資行、摂津国の源氏多田蔵人行綱をはじめ北面の大勢。

俊寛の沙汰 鵜川の軍

法勝寺の執行俊寛という人は、京極の源大納言雅俊卿の孫、木寺の法印寛雅の子。気性の激しか驕り高ぶった人じゃった。

新大納言成親卿は多田蔵人行綱バ呼んで「そなたバー方の大将にと頼りにしとる。上手くいけば国でん庄でん思いのまま与ゆる。まず弓袋料に」と白布五十端（反）バ送った。

安元三年三月五日、妙音院殿（師長）が太政大臣に移った後に、小松殿（重盛）が内大臣になった。

こがんことがあった。安元二年夏の頃、国司師高の弟、近藤判官師経が加賀国の目代に任じられた。

着任早々に鵜川ちゅう山寺ン寺僧と争い、僧坊バ焼払ってしもた。そんな返しに七月九日夕方総勢二千余人が目代師経の館近くに押寄せた。目代は京に夜逃げしてしもた。

願立

山門の衆徒は、国司加賀守師高バ流罪、目代近藤判官師経師経バ牢獄に入れるごて奏上したが、大臣も小臣もわが身大事で口を閉じていた。「賀茂河の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心になはんもの」ちゅて白河院もいうたとか。

去る嘉保二年三月二日、美濃守源義綱朝臣が美濃国に新しくでけた莊園バ廃止しゅうと比叡山にすんでいた円応バ殺害。この事により日吉社の神宮、延暦寺の寺宮三十余人が来たとは、後二条関白殿（師通）は大和源氏中務権少輔頼春にいいつけて防がせた。

山門では義綱処分の裁断が遅れてとるけん、日吉大社のみこしバ根本中堂に振上げ、そんなで七日間、大般若経バ真読し、後二条関白殿を呪うた。

後二条関白は重か病気にかかった。母が日吉神社に七日七夜祈ったけん一時軽くなっただばって、永長二年六月二十七日、三十八歳で亡くなった。

御輿振

山門の衆徒は国司加賀守師高バ流罪に、目代近藤判官師経バ禁獄するよう度々要求したばって聞きいれんじゃったけん、安元三年四月十三日午前七時半頃、十禅寺・客人の宮・八王子権現の三社の御輿バ振上げて進うだ。

そんなめ、朝廷から源平両家ン大將軍は、衆徒バ防ぐごて仰せがあった。

平家では小松の内大臣の左大將重盛公が三千余騎で陽明・待賢・郁芳の門を固むる。宗盛・知盛・重衡・頼盛・教盛・経盛などは、西南の陣を固めた。

源氏では、大内守護の源三位頼政卿が渡辺^{はぶく}省・授^{さすく}を中心に三百余騎で北の門を固むる。衆徒は手薄バみて、ここバ通ろうてした。

頼政は無勢のこちらから入るなれば、弱みにつけ込もうて通ったといわるるじゃろうけん、そんならば大勢で固める東の陣から入ったらどがんかと言った。

衆徒は納得し、東の待賢門^{たいけん}から入ろうとしたけん、暴動が起こり、衆徒は損害受けて比叡山に帰ってはった。

内裏^{だいり}炎上

同月二十日、堀川権中納言忠親^{ただちか}卿を公卿の主席として評議し、国司加賀守師高は免官、目代近藤判官師経^{もろつね}は獄に入れられらした。

同年四月二十八日午後十時頃出火した火事は、京中の大火となり内裏^{だいり}まで焼けた。山王権現の咎めバイちゅて、人たちちや思うた。

[トップページへ戻る](#)